【2021年10月26日発行】

THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES

日本国際文化学会ニューズレター 49号

http://jsics.org/

日本国際文化学会事務局
龍谷大学国際学部松居研究室内
〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
Tel:075－366－2223
Email: jsics@world.ryukoku.ac.jp

第20回全国大会 報告および御礼（開催校：近畿大学、オンライン開催）

第20回全国大会を終えて

第20回全国大会実行委員長　髙橋　梓
（近畿大学）

書面開催となった第19回全国大会に引き続き、近畿大学で第20回大会を開催することができました。COVID-19の感染蔓延に伴い、本年も現地開催こそ叶いませんでしたが、ZOOMを使用したオンライン大会を選択することでリアルタイムの議論を実現することができたことは、大きな喜びです。全国各地から会員が参加し、ZOOM上で議論を繰り広げる様子をずいぶん懐かしく感じました。多様な視角から、決して終わることなく果てしなく〈ことば〉を交わし、議論を展開する風景こそが日本国際文化学会のあるべき姿だと改めて実感した二日間でした。

学会大会ポスター

大会のテーマは前年度に引き続き、「個別主義の壁、普遍主義の壁―2020年代を切り開く〈ことば〉―」とさせていただきました。大会プログラムにも書きましたが、ウイルスが世界を分断し、ロックダウンという単語によって国や地域の境界が強固なものになる一方で、個人は自室からウェブを通じて他者との繋がりを模索しています。個別主義と普遍主義が新たな様相を見せる今の瞬間こそ、本テーマを議論するときであると判断しました。このテーマに賛同してくださった皆様には2本の共通論題と21本の自由論題をお届けいただき、まさに日本国際文化学会らしい多角的な議論が展開されました。

学会大会フィナーレ時の映像

シンポジウムでは、私が敬愛する木原誠先生に基調講演をお願いいたしました。「めぐり逢う時のなかの「個別/普遍」―「薔薇の名前」、現象としての「壁 / ことば」―」と題された講演は、知的刺激を超え、会員の心に深い感動を残すものだったと思います。木原先生の講演と真正面から議論したいという思いから、実行委員長である私自らがパネリストを務め、東北大学大学院で共に学んだ朝立康太郎さん（西南学院大学）、岡野薫さん（沖縄国際大学）とともに、「個別」と「普遍」というテーマと対峙しました。とてつもなく巨大なテーマを相手にした議論は、私たちだけではとても手に負えませんでしたが、フロアの皆様と懇親会までなだれ込むように言葉を交わす中で、様々なヒントと課題を見出すことができたように思います。

二日目のフォーラムでは、学会の20年間の歩みを振り返りながら、次のステージを目指して国際文化学のキーワード事典を作成する計画が発表されました。これまでの本学会の議論からいかなるキーワードが生まれていくか、今後の進展が楽しみです。

大会に加え、実行委員会は明日香村と橿原市を巡るエクスカーションを予定しておりました。こちらは近畿大学の学生に協力を仰ぎ、「飛鳥・橿原ヴァーチャルエクスカーション」と題した動画を作成して、大会両日の昼休みに上映いたしました。エクスカーション動画は学会ホームページから視聴できますので、ぜひ一度ご覧いただければと思います。

会員の皆様を始め、多くの方のご協力で開催することができた大会でした。全スケジュールが終わっても、どうしてもZOOMを停止することができず、皆様と手を振りながら「さようなら！」と叫ぶ勢いでようやくZOOMを閉じたことが思い出されます。初のオンライン開催ということで至らぬところも多々あったかと思いますが、それでも無事に大会を終えることができたのは、皆様のご協力のおかげに他なりません。今一度御礼を申し上げるとともに、近い将来には全国大会を近畿大学のキャンパスで開催できるよう祈念いたします。

全国大会フォーラム報告 ー20周年記念事業構想を中心に

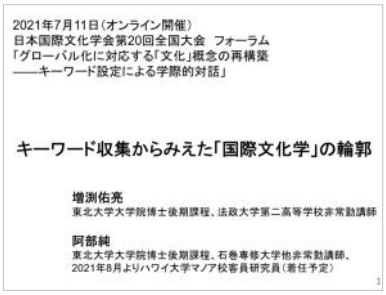
20周年記念事業実行委員長　菅野　敦志
（共立女子大学）

今年のフォーラムは、「グローバル化に対応する「文化」概念の再構築―キーワード設定による学際的対話」をテーマとして、7月11日（日）15:20～16:50にオンラインで開催されました。モデレーターは、菅野敦志（共立女子大学）が務めました。

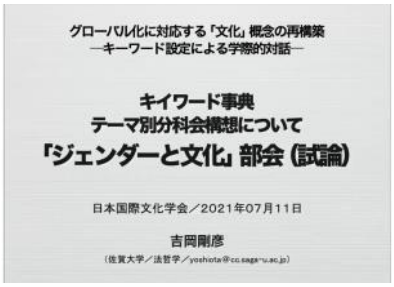
これまでの全国大会のフォーラムでは、例年さまざまな形で「国際文化学のあり方」が論じられてきました。今年度は学会創設20周年の記念すべき年であるため、フォーラムでは学会のこれまでの学問的蓄積を振り返り、今後の「国際文化学のあり方」を展望する方法として、キーワード収集というアプローチを用いた検討と20周年記念事業の説明を行うこととしました。

まず、「第1部　これまでの歩みを振り返る」では、過去20年間でいかなる「国際文化学」の輪郭や特徴が見えてきたのかを、学会誌掲載論文、学会発表などの膨大な情報から収集されたキーワードや、学会賞の授賞理由などを手がかりとして、新進気鋭の若手会員である増渕佑亮会員・阿部純会員（東北大学大学院）に、「キーワード収集からみえた「国際文化学」の輪郭」と題して報告していただきました。

増渕佑亮会員



阿部純会員



大和裕美子会員

吉岡剛彦会員

続いて、「第2部　これまでの蓄積を形にする」では、そうした議論を踏まえつつ、最終的には20年間の成果物としての『国際文化キーワード事典』あるいは『国際文化学事典』（仮）の完成を目標とした、20周年記念事業構想に関して、「キーワード事典テーマ別分科会構想について」と題した二つの報告がなされました。

報告については、構想中である事典の分科会メンバーを代表して、「紛争・和解と記憶」分科会リーダーの大和裕美子会員　（九州共立大学／国際関係）および「ジェンダーと文化」分科会リーダーの吉岡剛彦会員（佐賀大学／法哲学）に、それぞれの専門に立脚しながら、現時点でのアイデアおよび今後の方向性に関する概要を報告していただきました。

モデレーター・菅野敦志

そして、第３部「会員の強みと個性を結集させる」では、本事業に対する意見交換の時間を設けさせていただきました。紙幅の都合から一部しか紹介できないのは大変残念ですが、「時代によって変化してきた意識の変化や課題意識を抽出して提示すると良いのではないか」、「”インターカルチュラリティ”を共通項として示すことが一つの方法ではないか」といった、非常に建設的な提言を多くいただくことができました。それらの提言に対する応答としては、松居竜五学会事務局長からも丁寧な説明がなされました。

フォーラムでは、松居事務局長の尽力により作成されたアンケートを活用し、今回の報告に対する感想やキーワード候補に関する意見・提案をその場で収集しました。一部を紹介すれば、報告を聴いて、「差別や人の交流により起こる事例紹介が解決策の提示につながるという視点に惹かれ」たことや、「各分野の知見を吸収して、ディシプリンを超え、研究の可能性を広げ」るという展望が見出された、などの感想が寄せられました。地域的バランスについても、「ルワンダ・ジェノサイド」といったアフリカ文化のキーワード含めていただきたい、などの貴重な意見もいただくことができました。

松居竜五事務局長

何より、「学会のこれまでをふり返り今後を展望するとともに、国際文化学の立ち位置や意義を世に問う、非常に有意義な試みであると実感」した、という感想からは、喜びと同時に、本事業に携わることに対する責任の重みも改めて痛感いたしました。総じて、アンケート結果からは、本事業構想に対する高い期待と関心がうかがえ、大変心強く、また嬉しく感じられました。今回のフォーラムは、開始したばかりの20周年記念事業のキックオフイベントといった位置づけでしたが、本事業は学会員皆さまの「強みと個性を結集させる」ことで初めて実現可能となるものです。今後、会員の皆さまには項目執筆などでご支援およびご協力を賜りたく存じますが、本事業に対する忌憚のないご意見やご助言についても、ぜひお寄せいただければ幸いです。

飛鳥・橿原ヴァーチャルエクスカーション 報告

近畿大学での全国大会が決定した当初より、エクスカーションで飛鳥をめぐりたいと思っておりました。COVID-19の流行以前から、会員の有志と何度も飛鳥をめぐり、計画を立ててきました。当初は明日香村と橿原市に広がる一帯を「飛鳥」と表記するつもりでしたが、橿原市を探究することを明確化したいと考え、「飛鳥・橿原」と記載しております。この地域はともすると日本の伝統文化として語られますが、すべてが異文化との接触により形成されており、古代の文化触変を学ぶためには最適な地域です。

COVID-19により、会員の皆様をご案内することができなくなってしまいましたが、どうしても飛鳥・橿原をご紹介したかったこともあり、大会で動画を上映することにいたしました。飛鳥応援大使である藤田賀久会員(多摩大学)には、飛鳥文化の紹介についてアドバイスを請い、松井真之介会員(宮崎大学)にはフィールドワーカーとしての視点を活かして撮影を担当してもらいました。そして近畿大学で歴史サークルを立ち上げた経験のある平川雄一さん(四年)と、映画研究会の一員であり映像作品の編集に長けている清水美咲さん(四年)に協力をお願いし、飛鳥と橿原をめぐるエクスカーション動画の撮影スタッフが定まります。各所に撮影許可を取り、感染対策を整えた上で、飛鳥へと出発です。

【明日香村編】 https://youtu.be/SYHLBgjYbfk

① 飛鳥寺

日本で初となる本格的な伽藍を持った仏教寺院・飛鳥寺は、百済との文化交流を今に伝える空間です。飛鳥大仏は制作当時と同じ顔と指を備えており、顔の向きも変わっていません。寺院の外には畑が広がり、その中に蘇我入鹿の首塚がひっそりと佇んでいます。

② 高松塚古墳

1970年代に発見された高松塚古墳の壁画は、7世紀の唐と高句麗の文化が反映したものです。壁画は高句麗から受け継いだスタイルですが、唐の道教の影響も見られます。考古学的成果に基づいて復元された古墳からは、飛鳥の風景を一望できます。いかにも日本風な景色は、同時にアジア一帯によく似ており、一つの文化が様々な文化とのあいだで形作られることが理解できます。

飛鳥・橿原エクスカーションの動画は
学会のウェブサイトからご覧いただけます。
明日香村編 https://youtu.be/SYHLBgjYbfk
橿原市編 https://youtu.be/ER5f55g1VVI

【橿原市編】 https://youtu.be/ER5f55g1VVI

③ 菖蒲池古墳

明日香村と橿原市の境にある菖蒲池古墳は7世紀に作られました。ここは古墳の中の「玄室」を眺めることができます。かつて堀辰雄が「古墳」という断章の中で菖蒲池古墳をめぐり、古代人の他界信仰について思いを巡らせました。山の中に死者を収める古墳は、現在と死後の世界を繋ぐものであり、死者の世界が身近な自然の中に存在しているような印象を与えてくれます。

④ 新沢千塚古墳群(126号墳)

「歴史に憩う橿原市博物館」に隣接する新沢千塚古墳群には、約400の古墳を数えることができます。当日は博物館の松井一晃氏の案内で、126号墳といわれる古墳を見学しました。この古墳からはササン朝ペルシアのものとされる副葬品が発見されています。当時、この地がいかに多様な文化の影響を受けていたかを感じ取ることができるでしょう。

エクスカーションを終え、改めて古代日本が様々な文化との交流によって形成されていること、我々が安易に「日本的」と思い込んでいるものの背後に異文化の影響が潜んでいることを実感することができました。この企画に協力してくださった皆様、そして素晴らしい映像を作成してくださった清水美咲さんに心より感謝申し上げます。 近い将来、会員の皆様をぜひ現地にお連れしたいと思っております。

【共通論題１】社会的分断の時代における政治コミュニケーション：国際協力活動に焦点を当てて

湯浅拓也（代表）・伊藤丈人・齋川貴嗣（コメンテーター）・大山貴稔・政所大輔・渡邊康宏

本共通論題の目的は、社会的分断が深まる中で、国際協力活動を支える政治コミュニケーションがどのように変化し、またどのような課題を抱えているか議論することであった。

近年、国内外において社会的な分断が深まり、戦後の国際秩序を支えてきた普遍的価値が揺らいでいることが指摘されるようになった。そして、各国の対外政策はより「内向き」となり、ひいては国際関係の不安定化を招くことが危惧されている。こうした問題意識を踏まえて、本共通論題では、開発援助、宇宙開発、国際機構、人物交流などを題材に、政治コミュニケーションを取りまく課題について議論を行った。

はじめに、大山貴稔（九州工業大学）によって「〈利他〉から〈利己〉へ―日本の開発協力政策を枠づける社会規範の転換過程―」と題した報告が行われた。大山は〈利他〉と〈利己〉という言葉の体系を社会規範として捉え、日本の開発協力政策を振り返り、〈利他〉が周縁化し、〈利己〉が前景化してきた背景を通史的に明らかにした。そして、そこから開発協力政策において、国内の経済・社会事情との連関をいかに幅広く構想しうるかが課題になっていると指摘した。

次に、渡邊康宏（東京工業大学）によって「宇宙開発を巡る国際協力制度―政治化に伴うガバナンスの深化―」と題した報告が行われた。渡邊はアジア太平洋地域の宇宙機関会議（APRSAF）に着目し、その制度変化の過程に日中間の競争関係が影響していたことを明らかにした。そして、主権国家間の競争関係が分断や協力の停滞をもたらすのではなく、時として協力の深化を促す側面があることを指摘した。

次に、政所大輔（北九州市立大学）が「国連外交を通じた日本の政策的立場の変化―保護する責任を事例に―」と題した報告を行った。政所は、日本がこれまで消極的であった「保護する責任」という規範をどのように受容したか、その過程を示すとともに日本外交の政策変化について明らかにした。そして、政策変化を促した背景として、国際社会の諸規範間の関係性が整理されたこと、また国連を舞台とした「前線外交」が国家の政策的立場に変化を与えていることを明らかにした。

最後に、湯浅拓也（流通経済大学）が「「グローバル意識」の担い手たち：20世紀国際社会からの歴史的問いかけ」と題した報告を行った。国際連盟の設立につながる19世紀末の国際秩序の転換やその背景にあった社会改革運動について明らかにした。その上で、女性キリスト者知識人たちの役割が重要であったことを指摘し、女性キリスト教団体とその国際的なネットワークについて今後研究していく必要性について言及した。

これらの報告に対して、討論者の伊藤丈人（高齢・障害・求職者支援機構）と齋川貴嗣（高崎経済大学）から、各報告内容について質問がなされた。最後に、国際政治学を主な専門としている報告者に対して、国際文化学に対する示唆について質疑が行われた。国際協力活動は主権国家間関係だけでなく、ヒトやモノの移動、研究者や実務者の問題意識、市民の情報発信などさまざまな要素に支えられて成り立っていることが明らかになった。本共通論題での議論を土台として、政治コミュニケーションという視点から国際関係を分析する研究を今後も進めていきたい。

【共通論題２】オリンピックと政治宣伝（プロパガンダ）―1930年代の事例を中心に―

鈴村裕輔（代表）・飯森明子（コメンテーター）・中川拓哉

共通論題(2)「オリンピックと政治宣伝―1930年代の事例を中心に―」では、オリンピックが政治権力によっていかに活用され、どのような宣伝がなされたかが、オリンピックにおける政治宣伝の萌芽期であり発展期でもある1930年代に焦点を当てて検討された。報告者は中川拓哉会員（名古屋大学）と鈴村裕輔会員（名城大学）、コメンテーターは飯森明子会員（早稲田大学）、司会は鈴村会員が務めた。

ラジオ、映画、テレビジョンと、20世紀以降現在に至るまでオリンピックは最新の放送技術と密接に結び付いてきた。そして、オリンピック憲章において政治の介入が否定されているにもかかわらず、依然としてオリンピックは国威発揚や人々の一体感の醸成のためなどの重要な手段として用いられていることは周知の事実である。今回は1936年のベルリンオリンピックの成功を受け、オリンピックを国威発揚と対外的な日本の優越性の誇示の方法として活用とした当局の政治宣伝のあり方が検討された。

まず、中川拓哉会員の報告「オリンピックと「国民」　映画『国民の誓』を例に」は1940年に開催予定であった札幌冬季五輪と、ドイツの山岳映画の系譜に連なる日独合作映画『国民の誓』に焦点を当て、身体の神聖化、困難に耐え抜き苦境を克服する理想の国民像の描出のあり方などが議論された。

次に行われた鈴村裕輔会員の報告「「1940年の東京五輪」と政治宣伝」では、内閣情報部（後に情報局）が1938年2月に創刊した国内向け国策写真雑誌『写真週報』を対象に、「官製メディア」が東京オリンピックをどのように取り上げ、オリンピックと政治宣伝との間にどのような関係があったかを検討した。

また、飯森明子会員によるコメントでは、「幻の東京五輪」の研究の潮流を、(1)政治・外交史、(2)大衆社会論・メディア史、(3)スポーツ文化論、の3つに区分し、「外向きの国際『文化交流』」と「内向きの『国際』文化交流」との対比の下にオリンピックと政治宣伝の関係を検討することの受容性などが指摘さた。

本来であれば2020年7月に開幕する予定であった東京オリンピック大会が新型コロナウイルス感染症の感染拡大により1年延期されたこと、さらに今大会の開催を巡り関係当局の間で種々の混乱が生じたことで、今回の報告は図らずも過去の事例の検討を通して現在のオリンピックのあり方を問うという側面も持つこととなった。

昨年の書面開催での第19回全国大会に引き続き、今回の全国大会は学会としては初めての試みとなるオンライン形式により行われた。そのような中で50名を超える会員各位の参加を得たこと、また、日本国内の会員に加え外国在住の会員も参加したことは、オンライン形式による開催の利点が発揮された結果であると推察される。

いずれも大会の円滑な運営に献身的に取り組まれた高橋梓実行委員長をはじめとする実行委員各位の尽力の成果であり、深甚なる謝意を表する次第である。

【自由論題A】
交錯する日本と東アジア

牧田東一（司会）、
奥田孝晴、大和裕美子、斉藤 理

自由論題Aでは、日中、日韓関係の近現代史に関連する3つの報告が行われた。奥田孝晴会員による「『われわれの歴史』の紡ぎ方～学生・市民による『東アジア近現代史共通テキスト』編纂プロジェクト総括」、大和裕美子会員による「追悼碑への『バックラッシュ』現象―福岡県飯塚市『無窮花堂』を事例に―」、そして斉藤理会員による「20世紀初頭における『朝鮮館』をめぐる文化交流について―旧桜圃寺内文庫における事例を中心に―」である。

奥田会員の報告は、2005年の小泉首相（当時）の靖国神社公式参拝に端を発した中国、韓国における「反日運動」をきっかけとして始まったもので、東アジアの諸国民がそれぞれのナショナルな立ち位置を相対化しつつ、歴史認識をめぐる共同的な議論の場を創造し、「東アジア市民としての歴史認識」を目指した長期のプロジェクトの完了報告である。日本人学生、東アジア諸国の留学生、市民たちによる「東アジア近現代史共通テキスト編纂研究会」が立ち上げられ、討議→歴史記述→総括・編纂という作業が行われた結果、2010年に『東アジア共同体への道』（文教大学出版事業部）を公刊し、その後、2010年代史の追補版冊子を2017年に、そして英語版を2019年末に公刊したことが報告された。

大和会員の報告は、「強制連行」され日本で亡くなった朝鮮半島出身者の追悼碑の建立が1990年代に日本各地で行われたのに対して、2010年代以降に追悼碑の撤去や碑文修正を求める「バックラッシュ現象」が起きたことを対象としている。バックラッシュ現象はジェンダーフリー等の他の分野でも起きている。従来低俗とされて研究対象とならなかったヘイトスピーチ等の運動について、その影響力の大きさから研究が始まっているが、追悼碑に関するバックラッシュの担い手たちに関する実証的研究は少ない。大和会員は、福岡県飯塚市の「無窮花堂」を事例として取り上げ、これを問題とするバックラッシュ派の人々へのインタビューにより、彼らのライフヒストリーを調べながら、非難の内容や動機、彼らにとっての「問題解決」とは何なのかを調査した。

斉藤会員は、初代朝鮮総督の寺内正毅（1852-1919）が作った山口市の朝鮮館（現存しない）について、研究報告を行った。寺内は、蒐集した朝鮮関連の稀覯史料を保管・公開する目的で私設図書館「桜圃寺内文庫」（現存）を建てたが、その敷地の裏手に「朝鮮館」といわれる朝鮮様式の建物を建てたことが分かっている。当時、国内各地の博覧会においても朝鮮様式に則ったパビリオンとして「朝鮮館」なる建物が盛んに建てられたが、それに類似していたと思われる寺内の朝鮮館が、どのような意図で作られ、どのように朝鮮文化を国内に伝えるものとなったのか、を探っている。

いずれも日中韓の歴史認識に関する極めて微妙な問題に大胆にチャレンジした研究報告であった。問題解決には、現場から事実を積み上げていく学術的努力の重要性を感じた。

【自由論題B】
文学・宗教・思想に反映する個の文化

葉柳和則（司会）、田中佑実、半田幸子、朱 琳

自由論題Bの3報告は、個々の集団ないし個人による文化的行為や産物が、文学、宗教、思想といった諸局面にどのように現れるかを取りあげている。

第1報告は、「フィンランドにおける死者のカルシッコ――樹木と人間を結ぶエラマ/elämä」というタイトルの下、フィンランドにおけるカルシッコと呼ばれる印が付けられた樹木をめぐるフィールドワークに基づいて、人類学における「自然と文化」という問題圏にこの風習を位置づけている。鍵となるのは、カルシッコの樹木とそれに印を付ける人間とを媒介するて「エラマ（elämä）/人生、いのち、生」という言葉である。世俗化する現代フィンランドにおいてなお息づいているカルシッコという風習が人々の世界観にとって持つ意味を描き出す報告であった。質疑応答の中では宗教改革以降ルター派が主流となったフィンランドにおいて、より長い歴史を持つ宗教的風習であるカルシッコがどのように意味付けられているのかといった宗教社会学的な観点からの議論がなされた。

第2報告は、「ミレナ・イェセンスカーの記事に見る「個人主義」―エッセイ「個人主義と個人主義者」と1930年代後半の記事からの考察」というタイトルの下、戦間期チェコスロヴァキアのジャーナリスト、イェセンスカーの執筆した記事・エッセイに含まれる「個人主義」のテーマに着目して、国家的危機の時代にあって、彼女が個人／国家および個人／民族の関係をどのように構想していたのかを明らかにしている。外面的に言えば、チェコは1939年にナチス・ドイツに併合され、国家としての固有性を剥奪され、そこで暮らす人間の固有性も抑圧されていく。このような状況にあって、イェセンスカーは「内面的個性」を確立し、保持することの大切さを繰り返し強調した。質疑応答の中では、国家や民族という枠組みではなく、内面的なつながりを求めることは、ナチスの文化政策に対する反抗であり、ユダヤ系亡命者や共産主義者への共感を間接的に表明することでもあったことなどが議論された。

第3報告は、「戦時中日本における白話小説の受容――中国文学研究会と同人の翻訳活動を中心に」というタイトルの下、1934年に日本で創設された「中国文化研究会」（中文研）に集った知識人たちの活動を通して、戦時下の日中文化交渉史に光を当てている。従来の中文研研究は、竹内好と武田泰淳のみに特化する傾向が強く、この研究会の総体とその変容を捉えるに至っていない。本研究は、同研究会の機関誌である『中国文学月報』（のちに『中国文学』）に掲載された白話小説に着目し、当時の白話文学と時代状況との関係を描き出している。報告および質疑応答の中では、周作人の『紅楼夢』の翻訳を詳細に追うことで、翻訳という行為が同時代の社会状況を強く反映する、順応と抵抗の産物ものであることが明らかにされた。

【自由論題C】
マイノリティの文化戦略
岡田浩樹（司会）、入安ビラール、松井真之介、山川清太郎、林省一、ウィルソン・エイミー、岩野雅子

自由論題C「マイノリティの文化戦略」では、入安ビラール、松井真之介、山川清太郎、林省一とウィルソン・エイミーと岩野雅子（共同発表）の6氏による発表が行われた。

入安ビラール氏（長野大学教授）の発表は「各時代におけるウイグル文化の変遷」であった。現在、中国におけるウイグル民族問題は世界的に注目を集めている今日的問題であり、しばしばメディアでは、中国政府とウイグル民族の間の政治的な葛藤のみに焦点があたる傾向がある。発表では、ウイグル民族と中国の歴代王朝の周辺民族政策の歴史に注目しつつも、ウイグル民族の文化の変遷に着目し、単純な二項対立ではない文化の動態を示そうという壮大な試みであった。ただ、発表時間が限られているため、興味深い発表を十全に聞くことができなかった点は惜しまれる。

次に松井真之介氏（宮崎大学准教授）の発表のテーマは、「フランス語圏におけるアッシリア人ディアスポラの現在――ベルギーのコミュニティを中心に――」である。松井氏の長期間にわたる研究の成果を背景に、「アッシリア人」のディアスポラの状況がインタビューなど現地調査によって明らかにされた。ディアスポラ研究では、主にユダヤ人が中心的な研究対象であり、その理論的検討もユダヤ人のディアスポラ研究を出発点にしがちであるが、松井氏の報告は、ディアスポラ研究の新たな可能性を示す貴重な資料を提示した。

三番目の山川清太郎氏（京都先端科学大学非常勤講師）の発表は、「コートジボワールのスラング「ヌゥシ」の意味的傾向について」である。スラング研究は、使用される状況やコンテクストでしばしば意味や含意が変化し、体系的に理解することが困難である一方、社会のサブグループ、特に周辺的な地位におかれた人々の生活世界を理解する上で重要な研究対象である。一方で、社会の「周辺的存在」の下位文化、特に「逸脱」者には、当該社会の構造的問題が顕在化する。山川氏は、卓越したフランス語能力を駆使し、コートジボワールのスラングである「ヌゥシ」について、分類、意味そして含意についての報告を行い、コートジボワール社会のポストコロニアル状況と社会の周辺的な状況におかれた「マイノリティ」の様態を生き生きとして示した。

最後の発表、林省一氏（山口県立大学大学院）、ウィルソン・エイミー氏（同大学教授）、岩野雅子氏（同大学教授）では「増加する技能実習生に焦点を当てて考える多文化共生支援―― 山口県防府市の技能実習生調査から――」である。この発表では、山口県防府市の行政調査と協力しつつ、これまで具体的なデータや資料が十分に蓄積されてきたとは言えない地方の技能実習生の実態に関する貴重な調査報告の内容が示された。現在、COVID-19感染拡大の影響のため、停止している技能実習生の受入ではあるが、現在の少子高齢化と労働力不足の問題は、むしろ地方地域社会において深刻であり、今後も技能実習生を地方地域社会が受け入れていく状況は変わらないと考えられる。移民政策が欠如している日本では、技能実習生は非常に曖昧なグレーゾーンの立場におかれている一方で、実際に研修生を受け入れる地方地域社会（自治体）にとっては、その実態把握と対応は経済活動に限らず社会的な問題である。本報告では、その実態に関して実証的な資料を示したという点で、今後の他地域との比較など展開が期待される。

以上、自由論題C会場では、「マイノリティの文化戦略」を中心に、世界の多様なマイノリティの状況についての報告が行われた。本来は、発表者相互、あるいは参加者を含めた議論が大いに期待されるセッションではあったものの、on-lineの発表であったため、参加者の質問―発表者の応答という一対一の応答に限られた点が惜しまれる。

【自由論題D】
ヒトの交流と文化表象
斎川貴嗣（司会）、加畑杏理、山口祐香、平島（奥村）みさ、木村英里菜

自由論題セッションDでは、「ヒトの交流と文化表象」をテーマとして4つの報告が行われた。

第1報告の加畑杏理会員（大阪大学大学院）「大阪万博における日本の文化外交政策」は、1970年に開催された大阪万博について、文化外交の観点から関係機関が国内外に向けてどのような日本像を発信しようとし、それがどのような意味を持ったのか検討した。特に大阪万博の企画を構想した「万国博覧会を考える会」に焦点を絞り、対外発信のためのテーマと内部向けのコンセプトという点から、両者の競合と共存、そして「考える会」が果たした役割を分析した。

第2報告の山口祐香会員（九州大学）「『大阪築城400年まつり』の歴史表象をめぐる市民運動の展開と意義」は、1983年に開催された「大阪城築城400年まつり」を事例として、その歴史表象のあり方に異を唱え、反対運動を起こした市民グループの活動と言説を検討した。具体的には、こうした反対運動が、在日朝鮮人、労働者団体、女性団体など社会的マイノリティを含んだ幅広い市民運動として展開し、豊臣秀吉およびその歴史表象に対する反対と、人権の視点からの大阪都市開発への反対という二面性を持っていたことを明らかにした。

第3報告の平島（奥村）みさ会員（東洋大学）「文化遺産観光戦略における伝統文化の表象と商品化―シンガポールのプラナカン文化を事例として」は、シンガポールの観光戦略の特徴とプラナカン文化に着目した経緯を分析した。そして、近年シンガポール観光業にプラナカン・ブームとその商品化が劇的に起こった要因として、プラナカンをめぐる歴史認識の変化、人口内訳の変化、観光客の観光行動の変化を指摘した。

第4報告の木村英里菜会員（神戸大学大学院）「日本の広報文化外交政策の理論的考察―2004年外務省機構改革後の分析を中心に」は、2004年以降の日本の広報文化外交政策において、制度面、政策面ともに海外広報と文化交流の境界線が曖昧となり、従来海外広報で担われてきた対日理解の促進という目標が文化交流政策においても掲げられるようになったことを明らかにした。また、海外広報の戦略性という観点から、パブリック・ディプロマシー理論の有効性を検討し、モデルの修正を試みた。

以上の報告に対して、オンラインながらもフロアから多くの質問が寄せられ、活発な議論が行われた。加畑報告に対しては、万博とオリンピックの類似性、アジア・アフリカ諸国の参加の重要性などが指摘された。山口報告に対しては、反対運動の組織性や継続性が問題として指摘されると同時に、大阪の市民運動の先進的意義が確認された。平島（奥村）報告に対しては、シンガポール観光戦略の政治性やマレーシアとの対抗性をめぐって議論が行われた。木村報告に対しては、戦略性の意味内容について意見が交わされるとともに、広報文化外交政策における外務省と官邸（内閣官房）など政府内の他のアクターとの影響関係について問題提議がなされた。

【自由論題E】
文化に表出するナショナル・アイデンティティ

趙貴花（司会）、
藤原拓広、中川拓哉、山本博之

本セッションでは「文化に表出するナショナル・アイデンティティ」と題して、3つの報告が行われた。

第1報告は、藤原拓広氏（九州大学）の「ナショナル・アイデンティティの明瞭化の条件：リベラル・ナショナリズムの政治理論におけるネイション観の批判的検討」であった。同報告は、リベラル・ナショナリズム論におけるネイション観をめぐって、ナショナル・アイデンティティが明瞭化され得る国内的条件と国際的条件について検討した。報告では、特に国際的条件において1つのネイションはその他のネイションとの関係の中でのみ存在可能であり、国内的条件を一定程度満たした共同体の成員にはグローバルな正義の義務を果たしていくことが求められると指摘された。質疑応答では、ネイションの捉え方やアイデンティティの定義、国家に属さないネイションとネイションの自立、グローバルな正義と移民・難民などについて議論が交わされた。

第2報告は、中川拓哉氏（名古屋大学）の「アルプスをめぐる文化戦：戦間期劇映画におけるアルプス表象のドイツ・スイス比較」であった。同報告では、1920～1930年代のドイツ山岳映画と精神的国土防衛期のスイスの映画におけるアルプスの機能について考察がなされた。「土と血」を民族理念の基底に据えるナチズムに対し、多言語国家であるスイスは多様性にナショナル・アイデンティティを見いだし、国土であるアルプスは統合の象徴であったと指摘された。質疑応答では、宗教と国家の統合、国境防衛と「ネーションの自然化」などについて議論が行われた。また、1930年代から音声が映画に付与されたことが山岳映画に大きな影響を与え、特にスイス映画ではスイス独自のドイツ語を音声によって伝えることで、よりナショナリティを強調するような映画作りもできるようになったことが明らかになった。

第3報告は、山本博之氏（京都大学）の「英領マラヤにおける演劇と映画を通じた民族意識の形成」であった。同報告は、マレーの民族英雄の物語が題材とされる演劇・映画の『ハン・トウワ』とマレー語演劇の『バンサワン』の比較検討を通じて、演劇と映画がマレー民族意識の形成と普及に果たした役割について考察した。質疑応答では、民衆側の伝統の創造に関する質問に対して、山本氏は民衆による古典文学の演じ方は植民地官僚側の期待するものと異なり、その物語に対するせめぎ合いは植民地側と民衆側のせめぎ合いとして捉えることができると述べられた。また、『バンサワン』の物語が作られた複数の王国が存在する時代に、すでに人々の王国の枠を超えてのマラヤ人という意識がマラヤ全体で現れ、それが新聞や雑誌などを通じてさらに広がり、そこで生じる人々のさまざまな帰属意識や葛藤が恋愛物語の中で表現されていたと説明された。

以上、本セッションの3報告は、権力者側や民衆側など多角的な視点を提示し、アイデンティティの構築および表出における異なる「他者」の存在やメディアの影響を考える上で示唆に富む意義深い内容であった。

【自由論題F】
文化的特性の表象としての現代メディア

安田震一（司会）、
相原征代、齋藤大輔、関根理恵、武市一成

自由論題Fは「ミュージックビデオの比較から見える日本の「性の抑圧」の構造「Lady　Marmalade」と「ヘビーローテーション」の比較から」（相原征代会員）、「テレビ番組における文化的他者の表象―北タイ・カヤンとの「異文化交流番組」を事例として」（齋藤大輔会員）、“International developments of Digital Heritage –High value added memory and safeguarding of recorded mankind's knowledge”（関根理恵会員）、「日本社会における差別のワイドショー的展開－新型コロナウィルス感染症拡大下の店名「公表」と文化ナショナリズム」（武市一成会員）、の4つの発表がなされた。

まず、相原会員の発表では、「ムーラン・ルージュ」のカバー曲に登場する踊り子たちの服装と日本のアイドル・グループAKB48の「ヘビーローテーション」とは全く異なるミュージックビデオであり、「（女性）性」およびエロスが「かわいい」に取って代わられている。よって、エロスの対象ではないということである。相原会員はこの点を深掘りし、日本のエロティシズムに隠された対象の不服という欲望とその欲望を隠すフィルターとしての役割を果たす「かわいい」表現について述べられた。

齋藤会員の報告は、1990年からのテレビ番組で日本に対する夢と憧れに対して秘境と未開の比較する内容が多く放映された。とりわけ、東南アジア大陸部に居住するカヤンの女性のみが日本人家庭にホームステイするセッティングについて述べた。文化的他者として日本人家族の家に滞在し、交換ホームステイし、それぞれの生活や文化を体験する。その中で文化的他者の描き方がある。カヤンの人々は伝統や独自性を保持しており、前近代的な生活様式を持つことから日本人家庭にホームステイし、友情が芽生える。その一方で、日本人はカヤンの家庭に入り込み、「秘境」や「未開」と遭遇することを述べられた。

関根会員は、1970年代の急速なグローバル化のため近代的なナショナリズムを克服するためにユネスコにて長年指摘されていた文化的な多様性が問いただされ、その結果、2001年に文化的多様性に関する宣言がなされた。2003年に無形文化財に関する国際会議によって保護されることになった。文化財、著作権、知的財産の展開に関する内容であり、我々研究者に関係する分野であることは間違いない。さらに、多文化多様性を保護するために設定された。同時に文化的多様性および著作権についても具体的に認識されるようになったことについて述べられた。

武市会員は、2020年からの日本のワイドショーにおける差別的な展開について報告してくれた。文化ナショナリズムとテーマに、テレビのワイドショー番組が政治の動きと同時並行的に世論を煽る様子に関して言及した。取り上げたテーマは新型コロナウィルス感染症の流行（パンデミック）についてであり、営業自粛を行わない飲食店に対する中傷や脅迫行為、さらにはパチンコ店の公表圧力を強めていくプロセスは日本社会特有であり、文化ナショナリズムを利用した差別の典型的な事例として挙げられる。こうした日本文化固有の問題として語られたことについて報告された。

「文化的特性の表象としての現在メディア」の部会では、近年メディアに登場した番組について述べられ、親しみやすいテーマが多かった。

私の研究履歴―会員紹介【新コーナー】

従来の若手研究者紹介に加えて、今号から会員紹介のコーナーを設けました。お一人目は、甲南女子大学の湯淺章子様にご寄稿いただきました。湯淺会員にはICCOセミナーにおいても多大なご尽力をいただいています。

湯淺 章子
（甲南女子大学 教授）

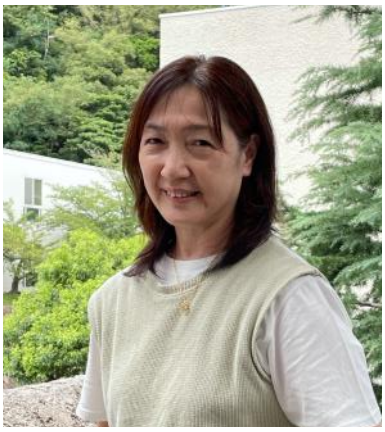
日本国際文化学会会員の皆さま、こんにちは。昨年度入会させていただきました甲南女子大学国際学部の湯淺章子と申します。

事務局長の松居竜五先生より、学会ニューズレター第49号の編集にあたり、新たに「私の研究履歴」というコーナーを作ることになったのだが執筆してくれないか、とのご連絡をいただきました。私のような新参者が書かせていただくことに躊躇もあり、また新設コーナーで前例もなく、どのように書けばよいのかわからない状態ではありましたが、原稿を寄せさせていただきました。どうぞよろしくお願い致します。

私は、2002年に神戸大学にて、論文「日本語、インドネシア語における態と他動性」で学位（博士（学術））を頂き、そこから本格的に研究生活をスタートさせました。これは、日本語とインドネシア語との対照を通じ、両言語において他動性や態がどのように認識され表現されているのかを'transitivity'を軸とした様々な視点から検証したものです。この論文のベースとなったのは、インドネシア大学大学院への留学、及びジャカルタのナショナル大学、ダルマプルサダ大学にて、日本語、日本文学を教えた経験であり、インドネシア語話者が日本語を習得する際に見られる問題点の分析から着想を得たものでした。また、この学位論文に先立ち、大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）修士在学中に書いた論文が学会誌に掲載されたことが、神戸大学博士課程で学位論文を書くきっかけとなっています。

その後も、'Volitionality' 'Responsibility'という2つの認識に着目しながらインドネシア語の態を分析した研究や、空間認識から両言語の普遍性と個別性を検証した研究など、日本語とインドネシア語に関する'transitivity' を軸とした様々な視点からの検証を行ってきました。

私は言語系研究者ですが、言語そのものの分析というより、言語と文化を繋ぐ傾向の研究をしてきたと思います。様々な言語対照から言葉の中の「世間」と「世界」を浮き彫りにした 2006年共著の『シリーズ言語対照：言語に現れる「世間」と「世界」』にて「日本語、インドネシア語の受動表現にみる「世界」と「世間」」について書いた論考はその一例です。



著書等では、インドネシア語のイディオム/ことわざ/オノマトペに関する表現を、日本語の表現と対照する形でまとめた『インドネシア語150単語を使いこなそう』（2004年）や、20名余りの研究者と共に4年間取り組んだ日本初の本格的インドネシア語辞典『プログレッシブ インドネシア語辞典』（2018年）等にも執筆者の一人として関わらせて頂いております。

学会発表も様々させて頂きましたが、一番最近の発表としては、2021年9月にインドネシアで実施された「国際シンポジウム」（zoom）にて、「日本語vsインドネシア語の文末表現～意味は音声に影響を与えるか」を、日本語とインドネシア語を交え、チームでプレゼンさせて頂きました。

私が今まで研究を重ねてきた中で、特に嬉しかったことは、2007年8月、インドネシア共和国外務大臣より表彰（インドネシアと日本の友好関係向上と教育に貢献）を受けたことと、上述「国際シンポジウム」にインドネシア/日本他より566名の研究者がご参集くださり、共に研究について語り合えたこと、です。

日本国際文化学会にはICCO申請の関係からご縁ができ、昨年入会させていただく形となりましたが、領域横断や様々な分野に橋を架ける研究を歓迎されるご姿勢に、非常に感銘を受けております。今後もがんばりますので、どうぞよろしくお願い致します。

インドネシアで行われた「国際シンポジウム」のポスター

国際文化学会　若手研究者紹介

今号の「若手研究者紹介」のコーナーには、朱琳さんにご寄稿いただきました。

朱　琳
（仙台高等専門学校　助教）

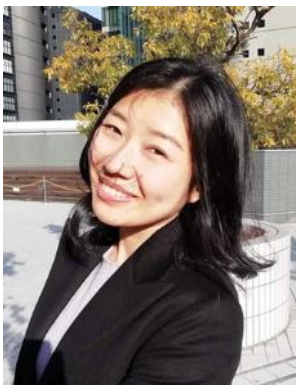
知の「萃点」を求めて

長い研究生活の中にあっちこっちに首を突っ込んで、現在でも彷徨っているようです。

学部時代から時々緊張感を走る日中関係を見て、「おかしいなぁ」と首を傾けながら、研究課題を戦時下の日中相互認識と決めました。東北大学に進学してから、「中国文学研究会」(1934-1943)に焦点を当て、目を皿にしてさまざまな資料に没頭しながら、多くの論点を洗い出した。しかし、博論を書きはじめると、自分の研究はバラバラしている部品のように見えて、全体的なバックボーンが見えてこない！と、非常に悩んでいました。

この「大きな悩み」と苦闘していた時期に出会ったのは、平野健一郎先生の『国際文化論』でした。毎月小林文生先生を中心に開かれた読書会に参加し、「文化触変論」に感心し、文化人類学、思想史、国際関係、社会学など、様々な分野で語られた文化交渉の諸現象に強く刺激されました。そのとき、自分の研究がバラバラの部品に見えたことは、おそらくあまりにも分野や枠などに拘ったからと感じました。

博論を出したあとも彷徨い続けました。2年前、鶴見和子の研究を通して南方熊楠という人物を知りました。特に鶴見の熊楠論にもっとも興味深く感じたのはいわゆる「南方マンダラ」の「萃点」です。ごく大雑把に言えば、「萃点」は写真1における「イ点」に象徴されているように、あらゆる物事の相関関係を意味しますが、これを初めて見たとき、まさに自分の追求しようとする学問の理想像が見えたような気がしました。歴史の流れに浮き上がっている多くの人物の思想と言論は決して独り歩きのようなものではなく、分野の境界線にとらわれない柔軟さが必要となります。



現在、中国文学研究会の戦後活動と同時進行で、鶴見和子の近代思想に関する研究プロジェクトにも取り組んでいます。中国文学研究会、鶴見和子、南方熊楠、中国認識、近代化論…キーワードをつまみ出したら、一見関係なさそうなものばかり！しかし、これらのキーワードの根底に潜んでいる「萃点」を少しずつ発見しようとしています。たとえば、竹内好のような知識人はなぜそれほど「中国」という他者に執着していただろう。結局、それは中国という「他者」を通して「自己」(＝日本の「近代」化という歴史)の内面を振り返ろうとする動きであり、さらに日本の近代化の歴史を相対化しつつ、新たな発展様式を築こうとしたのは、まさか鶴見和子の仕事です。日本の近代と中国の近代、一見まったく異なる道を歩いてきたかもしれません。しかし、その裏にあるさまざまなつながりと相互影響を発見することが、自分の研究の楽しさだと感じました。国境、イデオロギー、学問間の境界線ばかりにとらわれず、森羅万象の中に眠っている知の「萃点」を求めることは、国際文化学ならではの醍醐味だと思います。

彷徨いの終点に何が見えてくるのかまだまだ分かりません。けれども、初心を忘れずに進めたいと存じております。

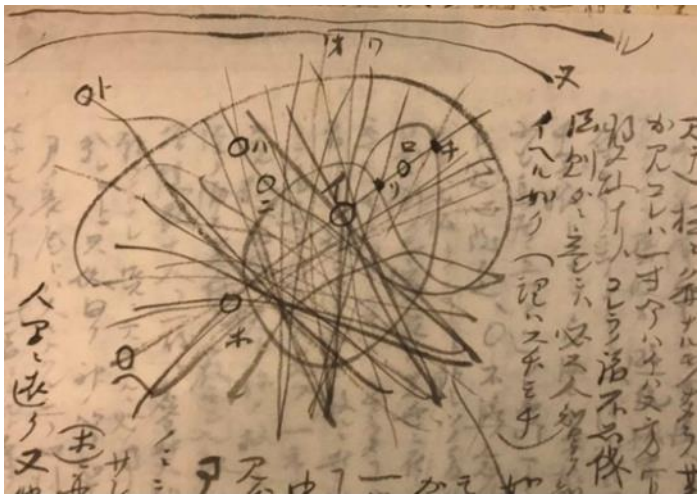


写真1　「南方マンダラ」と「萃点」
（南方熊楠顕彰館所蔵、筆者撮影）

おまちしています

次回の「私の研究履歴」、「若手研究者紹介」に掲載を希望される方を募集しております。
自薦他薦を問いません。

「この方の紹介を読んでみたい！」
などのリクエストもお待ちしております。

応募先/問い合わせ先：学会事務局
jsics@world.ryukoku.ac.jp

事務局からのお知らせ

学会誌『インターカルチュラル』著書紹介・博士論文紹介記事募集（締切：11月7日）

『インターカルチュラル』20号掲載の著書紹介、博士論文紹介記事を募集中です（11月7日締切）。
博士の学位を投稿締め切り日までに取得または取得確定したことを申告する会員は、年報の博士論文紹介欄に要約を発表することができます。入会申し込みと同時に投稿することもできます。
詳細は学会WEBページにてご確認ください。
●応募先/問い合わせ先: 年報編集委員会 editorialboard.intercultural@gmail.com

ニューズレター＆メーリングリスト掲載情報募集（随時）

- 学会会員の新刊の情報など（ニューズレター・メーリングリスト・学会誌等へ掲載予定です。）
- 採用情報やその他の会員に有用と思われる情報（メーリングリストに掲載予定です。）
  ぜひ学会事務局までご連絡ください。

全国大会開催校募集

本学会の全国大会は、2022年は神戸大学、2023年は名城大学での開催を予定しております。
2024年以降の開催のご希望があれば学会事務局までお知らせください。
複数のお申し出がある場合には、地域等を考慮して開催順を決定させていただきます。
- 応募先/問い合わせ先：学会事務局　jsics@world.ryukoku.ac.jp

2022年度全国大会開催のご案内

2022年度の日本国際文化学会全国大会の開催予定日は下記のとおりです。
日 時 ： 2022 年 7 月 9 日（土）・ 10 日（日）
会 場 ：神戸大学国際文化学研究科（鶴甲第 1 キャンパス）
現地開催が適切で可能な内外の状況であれば、現地開催にて実施予定です。
共通論題（12月末募集締切）、自由論題（2022年3月20日募集締切）の申し込み方法などの詳細は
メーリングリストや学会WEBページにてご案内いたします。
応募先/問い合わせ先：第21回全国大会実行委員会　JSICS2022@gmail.com
（神戸大学国際文化学研究推進センター内）

会費納入のお願い

・2021年度会費を未納の方はお振込みをお願いします。
正会員　一般会員：10,000円、大学院生：5,000円
学部生：2,000円（学会誌は別途購入）
◆ゆうちょ銀行へ振替用紙を使用してお振込みの場合◆
記号番号：00920-8-325835
◆ゆうちょ銀行以外からお振込みの場合◆
ゆうちょ銀行 店番〇九九・店番099・当座預金・
口座番号0325835
名義：日本国際文化学会
・年会費未納分は速やかにお振込みお願いいたします。
・過去の会費未納分は相当額の学会誌購入で充当できます。
・会費納入に困難を覚える方に対する減免制度があります。
※詳細は事務局までお問い合わせください。

◆学会誌の販売について◆

学会誌『インターカルチュラル』の追加購入や、バックナンバーのお求めは**日本国際文化学会事務局**まで、メールまたは郵便でご連絡ください。

※セット販売は郵送料無料です。
※個別に購入の場合には、
送料をご負担くださいますようお願い申し上げます。

編集後記

事務局の松居竜五です。7月の全国大会の際には、オンラインで多数の方にご参加いただきありがとうございました。私は伏見の龍谷大学から西大寺経由で東大阪の近畿大学まで、一人でトコトコ出かけてきました。機能的なビルが建ち並ぶ近代的なキャンパスを初めて訪れて、中世・近世に起源を持つ龍大とは対照的な精神性を感じました。来年は六甲山の入り口あたりに位置する神戸大学での全国大会。この関西文化の多様性をICCOにも活かしていきたいものです。

近畿大学C館（画像提供：近畿大学